

### 第3回「一流・本物と未来を語る居酒屋懇親会」参加者レポート

2008年5月22日(木)ダーナ・ウェルトン女史(在札幌米国総領事)を主賓にお迎えして



「失敗を恐れないで」

#### 「一流・本物と語る懇親会に参加して」

経営学部2年 AA

今回の、一流・本物と未来を語る会に参加できてとても嬉しく思います。このような場を用意して下さった菅原先生と、参加して下さいたダーナ・ウェルトン総領事、馬場さんに感謝します。

領事館スタッフの馬場さんの人柄には圧巻されました。理由は何であれ、きっかけを作るのは自分であって、行動力がモノを言うのだと思いました。理由はパツとしないかもしれないし、ただの憧れかもしれないけれど、思い立ってアメリカに行ったことが人生のターニングポイントになっているのだと思います。アメリカの大学での勉強が今でも夢に出てくるほど大変だったとおっしゃっていましたが、私もそれぐらい日本の大学で勉強してやろうと密かに思いました。その時は大変かもしれないけれど、絶対に後でやって良かったと思えるはずです。

ダーナ総領事は日本の歴史に詳しくて本当に驚きました。日本で生まれ育った自分が、自国の歴史すら知らないことを恥ずかしく思いました。

総領事がおっしゃっていた「失敗を怖がらないこと」。頭ではわかっているもいざとなると一歩引けてしまう人が多いと思います。私もその一人です。ですが、何事もトライして

みなければ始まりさえもしないし、学ぶこともありません。あのとき、ああすれば良かった！と後悔の念を抱いたまま生きていくより、一度失敗してしまったけれど、その時学んだことを生かして何度もトライして生きていくほうが数倍実りある人生になると思います。

初めは、4000 円という参加費に参加を躊躇してしまいましたが、ホテルのフレンチレストランで食事ができて、さらに何倍もの価値のあることを学ぶことができました。ディナーがおまけみたいに感じました。お二方のお話を聞いて、自分のモチベーションが上がったのを実感しました。これから自分磨きに勤しみたいと思います。本当にありがとうございました。

## 「一流に学ぶ居酒屋懇親会、後悔だらけ」

経営学部 2 年 TM

今回の居酒屋懇親会では後悔することの方が多かった。自分が考えていった英語の質問すらできなかつたし、思っていた通りにしゃべることが全くできなかつた。しかし後悔ばかりの中でも学べたことはある。それは以下の三点である。

まず一つ目は、自分の状況をよくふまえるということである。なぜなら、自分の状況を理解しておかないと、物事をうまく進められているうちは良いのだが、うまくいかなかった途端に何もできなくなってしまうからだ。

たとえば付け焼刃程度に付けた株の知識で一旦は儲けがでて、どこかで損をした時に今回はたまたま運が悪かっただけだ、などと思いついでさらに損失を出してしまうかもしれない。自分をしっかり理解していれば状況を改善することは難しいことではない。

ダーナウェルトン女史も赴任先で「自分にできない仕事もあった」と仰っていた。私はこの言葉はできない仕事があるということに対しての苛立ちや自分に対しての呵責からでてきた言葉ではなく、自分のやれることをやった上でできなかった仕事があった、という最大限努力した上での言葉だと感じた。

次に、自分から動き出すことである。私はダーナウェルトン女史がものすごくパワフルな女性だと感じた。言葉の節々や目の輝きなど、二十歳の私より元気なのではないかと感じるほどだった。それはきっと何事にも積極的に挑戦する姿勢から来るのだと思う。たとえば、つまらないことだと思うことで少し見方を変えて自分がやる気を出せば、楽しくなるかも知れない。自分が変われば周りの人、もしかしたら世界も変わるかも知れない。この積極的な姿勢で臨んでいくことが大切なのだ。そのため、つまらないことを面白く、面白いことはもっと面白く、と考えられるようになった。

最後に、他人との出会いを大切にすることである。ダーナウェルトン女史は私たちの話を嫌な顔一つせず聞いてくれて、丁寧に答えてくれた。これは誰にでもできることではな

い。確かに、大使館の仕事は、たくさんの人と出会うため、日頃からこやかに他人に接していると思う。しかし、私たちに話していただいた話もダーナウェルトン女史の気持ちや人生そのものが息づいていて、少しダーナウェルトン女史という人が見えた気がした。

そのことから他人と出会うということは自分を見つめなおすチャンスをもたらえるということなのではないか、という結論に達した。自分を見つめなおすチャンスが増えれば増えるほど、自分を磨くことにつながる。だからダーナウェルトン女史は私たちに対してもやさしく、丁寧に接していたのではないかと感じた。

以上の三点から、もう二度と後悔しない。もっと自分を知り、自分で動き、出会いを大切に、生活するようになった。今回の懇親会は自分にとってはとても意味のあるものであった。

## 「一流の条件」

経営学部 2年 KF

総領事や外交官のような職業をやる人だから一般人とは違う雰囲気を持っていて、超エリートで偉そうな顔をした、近寄りたがたい人が来るのではないかと心配していました。しかし、ダーナ・ウェルトンさんは全くそんな人ではありませんでした。

ウェルトンさんは高い地位の人であるにもかかわらず、私たち学生にとっても優しくしてくださいました。懇親会が始まってすぐのころ、苦手な英語と慣れないフランス料理に緊張して黙ったままの私たちを見て、すぐに英語をやめて日本語でお話ししてくださいました。難しい政治や経済の話をするわけでもなく、家族のことや趣味の話をして、私たちが話しやすくなるよう気遣ってくださいました。たとえ目下の相手でも偉そうな態度をとったりせず、真摯な態度で接してくれるのが本物の一流なのだと思います。私も人と話すときの態度や言葉づかいに気を付けるようにしていきます。

今回一番印象的だったのは、ウェルトンさんの「政府のためじゃなく民間のために働いている」という言葉です。最近日本では公務員のズル休みなどの不祥事が多くて、本当に国民のために頑張っている公務員なんていないのではないだろうかと思ってしまうのですが、ウェルトンさんのように本当に自分の仕事に誇りを持って民間のために頑張ってくれる人もいると知りうれしく思いました。いかに楽をして金を稼ごうか考えるのではなく、人のために働こうと考えられるところが、ダメな人間と一流との決定的な違いだとわかりました。

最後に「失敗を恐れないで。」というメッセージをいただきました。これは別段目新しい台詞ではありませんでしたが、ウェルトンさんに言われるとものすごく説得力があります。自分は今まで失敗を恐れて楽な道を選ぶことのほうが多かったと思います。しかしそれで

は一流とよばれる人にはなれないと学びました。ウェルトンさんだっておそらく今の仕事に就くまでたくさんの失敗をされたことでしょうか、それでも恐れずチャレンジしたからこそ、このメッセージを私たちに贈ってくださったのだと思います。

これからは、失敗を恐れずに苦手なことや何か新しいことに積極的に挑戦していこうと思えました。私が苦手で避けてきたことは文章を書くことと英語です、これらはゼミや独学で克服していこうと思います。

## 「一流を実感」

経営学部2年 RS

今回初めて“一流と語る居酒屋懇親会”に参加しました。普段の生活の中で一流の人々と間近で直にお話を伺える機会なんてめったにないことなので参加できたこと、ウェルトンさん、馬場さんのような一流の方々と話ことができ、多くの刺激を受けられたことをとても嬉しく思います。

居酒屋ではなくてホテルでの食事ということだったので、初めはかなり緊張していました。実際にお会いするウェルトン女史と馬場さんはとても柔らかい雰囲気をお持ちでたいへん親しみやすかったです。お二人はパワーが満ち溢れていて、私はそばにいただけでピンとしたゆるみのない空気に触れることができました。この空気の源は強い意志と行動に移す積極的な行動力からきているのかな、と思いました。お二人が話す内容の一つ一つに力があつたと思います。

お二人にとって当たり前だと思われる有言実行はその精神が貧弱すぎる私にとって、この上ない強い刺激となりました。馬場さんのおっしゃったもので、「人に聞くのではなくて何でも自分で調べなくてはいけない。」といった内容の言葉がとても印象に残りました。自分自身で調べることは、当たり前のように多くの人がきちんとできていないことだと思います。ついつい人に頼って何でもかんでも聞いてしまう、それが私にとっても当たり前になっていました。改めてこういった言葉を聞くと自分はただ人に甘えていたんだなぁ、と実感させられます。

また、ウェルトン女史がおっしゃっていた「失敗を恐れないこと」、よく耳にする言葉ではありますがとても印象に残っています。英語を話すことにしても、自分の意見を発表するにしても、失敗を恐れていることが多々あります。堂々と自分の意見を言えることは失敗を恐れないことに通じていると思います。

この懇親会で私はやっぱり受身で多くを質問することができませんでした。お話を聞いているだけで刺激を受けたのだから自分から進んで質問していたら、より刺激を受けられたことと思います。有言実行とその行動力、これから身につけられるようにしていきたいです。このような機会にまた参加できることを楽しみにしています。

## 「一流・本物の人と普通の人の違い、北海道の経済活性化への道のり」

経営学部4年 KT

今週、私はウェルトン在札幌米国総領事館総領事と懇親会でお話しする機会を頂いた。事前に念頭に置いていたことは、まず一つが成功者と一般人の仕事への考え方の違いであった。仕事ができるかできないかの違いは一般の会社員にもある。けれども、一流と呼ばれる仕事をしている人達は、一般の人よりも仕事に対して高い意識を持っているのではないかと思ったからだ。もう一つは、まだ社会に出ていない自分たちは知識でしか今の道内の経済状況を知らない。実際に社会で働いている一流人に、国際的な視点から北海道経済を活性化するにはどのような方法を取ればいいのかという意見を聞いてみたいと思っていた。

質問内容を考えながら緊張して待っていると、ウェルトン総領事は領事館内で経済商務を担当している馬場さんと一緒に現れた。やりたい仕事は何ですかと英語で聞かれて「FOOD...関係」と言ってしまう皆の失笑を買ってしまった。しかし、それからは緊張がほぐれてきて次の質問から自分でも驚くほどスムーズにできるようになっていた。

まず、現在低迷している北海道経済を活性化するには、どうしたらよいかという内容の質問を総領事に聞いてみた。以前同じ内容のディスカッションを授業でしていた私は、北海道の強みは自然等の観光資源か食品くらいしか無く、現実的に経済活性化への道のりは難しいという話を先生から聞いていた。

私も北海道の魅力について考えたときにやはりその二つの分野が強みと思い、自然を活かした観光産業と北海道の第一次産業に関する話題が答えとして返ってくるのではないかと予想していた。具体的には、現在は食の安全が危ぶまれていて、北海道の安全な食品をもう一度全国にアピールし直すよい機会である。そのために、生産量を増やし食料自給率を上げることに今は力を入れるべきと考えていたからだ。

しかし、ウェルトン総領事の答えはそんな狭い考えではなかった。北海道の農業は組合の力が強いせいで、農家から販売店へ届くまでに関わる仲介が多くなる。つまり、食品の値段が上がってしまう。農業は確かに北海道の強みの一つだが、現在の農協を通して農作物を販売する制度のままだと、北海道が変わらない限り第一次産業が伸びていくのは難しいという厳しい意見であった。北海道の企業が自らの首を絞める現在の制度では北海道の経済構造自体がそのまま弱みとなりかねないのである。

一方、アメリカでは農業が産業化していて、地主が土地を貸して農作物を作らせてマージンをもらっている。しかし、アメリカでも北海道ほどではないにしろ、組合の力が強くまだまだ問題が多いと総領事は教えてくれた。それならば、農業のノウハウを中国やインドへ持ち込み、安い人件費で農作物を作るのはどうかと訊ねたところ、その考えは日本の農業技術の流出につながり、日本の農業に脅威を与える存在を自らの手で育てることにな

るのでお勧めできないと言われた。

では、もう一つの強みである自然を活かした産業を発展させるのは難しいのかと訊ねると、北海道の自然は世界に誇るものである。しかし、弱みとしては知床に行こうと思って交通整備が整ってなく、一般の人が気軽に行くには難しいという答えが返ってきた。私は最近何かと夕張市に縁があり、一週間に一回は夕張市へ車で行く。車がなく、公共交通機関を使う場合夕張市は午後3時を過ぎると帰りのバスはなくなり、JRの特急券4700円を買わないと帰ってくるができない。そのような経験から、意外と北海道の公共交通機関が整っていないことは身をもって感じていたので、総領事の的確な意見に私は頷くことしかできなかった。

続いての質問は、現在北海道は国に財源を頼っているが、国からこれ以上何かしてくれるという保障はもうない。では、北海道も国際化の波に乗り外国からの企業誘致を活性化することは難しいのかと訊ねた。総領事は道内企業には排他的なところがあると言及した上で、力を持っている外国企業と戦える道内企業は少ないと述べた。そして、外資系の会社を誘致しすぎると道内経済のバランスを壊す恐れもある。

それならば、あなたが外国へ行き経済や経営のノウハウを学び北海道に戻り会社を立ち上げたほうが早いのではないかと言われた。私は少し前までは北海道が好きで、できれば道内に就職し、安定した仕事をしたいと考えていた。しかし、ずっと北海道にい続けるのはひょっとしたら多くのチャンスを見逃してしまうのではないかと最近思い始め、何か自分でアクションを起こしたいと考えていた。そのようなことが頭をめぐり、気がつくとは総領事に対して「YES」と言ってまた頷いていた。

北海道経済の話からプライベートな話、趣味や学生時代の話をしているうちに、私はすっかり総領事と打ち解けていた。最近克服できてきたが、以前人見知りだった私は初対面の人と話すときにはやはりどうしても緊張してしまう。しかも、在札幌米国総領事館の総領事となればなおさら緊張するはずなのに、お酒の勢いもあってか「大学生の息子さんがいるんですか、えーそんな年のお子さんがいるようには見えませんね」など軽口を叩いても、総領事は笑って答えてくれた。もちろん礼儀礼節は忘れていたわけではない。

それにしても私のような学生がなぜこんな一流の人と普通に会話することができるのかと疑問に思っていた。誰からの質問に対しても丁寧に答えてくれる総領事は相手が学生だからといって小馬鹿にした話し方をするでもなく、相手と同じ目線で話をしてくれる。普通は、肩書きや立場のある人ならば、話す相手も肩書きで判断し、それが態度に出るものだと思っていた。

しかし、総領事からそんな気配は一切感じられず、どんなに稚拙な質問でも一生懸命考えて自分の意見を述べてくれた。仕事に対しては自分が任期の最中にその国とアメリカの距離が近づくことに何より達成感を感じ、仕事のやり辛いイラクやパキスタンにはあまり行きたくないのだそうだ。なぜなら、危険だからというわけではなく、単純に外に出られないためあまり活動出来ないからという理由だった。

また、総領事は過去の失敗のことはあまり考えず、常にこれからどうしていくかという先のことに關心や興味があると述べた。そして、もし失敗してもその失敗から何かを学べば、その失敗は無駄ではない。むしろ勉強になったと思うべきで、前向きに考えていくことが大事である。そうすると自然と経験や実績は出来ていくと言われ、私はとても勇気付けられた。菅原先生にも失敗することを恐れちゃダメだと言われたことを思い出し、バイト先などで失敗しない事を第一に考えながら働いていた自分を少し恥ずかしく思い、同時に成功している人達の言うことにはやはり共通する点があるのだと感じたのである。

そして、席替えをして私は経済商務担当の馬場さんと話をさせてもらう機会をもらった。まず最初に、仕事がうまくいっていないときに下がってきたモチベーションを上げる自分なりの方法は何かありますかと尋ねた。馬場さんは、常にかんばり続けることが出来る人はいないので、やはりどんな人にも息抜きは必要だと述べた上で、私は仕事と関係ない好きなことをすることにしていると教えてくれた。

具体的には、よくゴミ拾いのボランティアに参加し、活動を通じて充実感も得られ、町がきれいになることでみんなも喜び、みんなに喜ばれると私も嬉しいと答えてくれた。感心した私はさらに、米国総領事館で働くことになったときはどんな気持ちだったかと訊ねたところ、嬉しさよりも不安のほうが大きく、今もまだ仕事に追われている毎日が大変だ、でも、ウェルトン総領事といると仕事以外にも学ぶ点が多くすごく勉強になると述べてくれた。

その言い方が普段居酒屋で聞くサラリーマンの上司へのおべっかとは何かの違い、馬場さんは一人の人間としてウェルトン総領事のことを尊敬しているのだと感じられた。そして、総領事を見ていると私ももっと頑張らなきゃいけないと感じると言った馬場さんを見て、本当の一流の人間は周りの人達にパワーやエネルギーを与えることが出来る人間であり、仕事が出来ただけではなく、やはり意識や考え方も普通の人とは何かの違いを感じたのである。

総領事や馬場さんとの会話を通して、一流の人と普通の人との違いは確実にあることがわかった。しかし、どのように違うのか一流の人達に共通する考え方とは何なのかという疑問が課題として残った。今回わかった唯一の共通点は二人とも私欲に走ることはせず、仕事や生活を通して社会に貢献するという意識が他の一般の人より強い点だ。

また、北海道経済の活性化は、少なくとも変化することを恐れているうちは何も変わらないし、良くもならないのである。私の考えとしては、生まれ育った土地であるから愛着も強く、現在の経済状況は残念という気持ちが強い。しかし、誰かが何とかしてくれると思いつける人が多数を占める限り、事態は当然悪い方向へ進むのではないだろうか。そして、先生が言うように、もし北海道がタイタニック号だとしたら、まだ大きな冰山にはぶつかっていないはずである。いつかはぶつかって沈んでしまうかもしれない。まだ回避は可能なのか、沈むことは避けられないのか。自分の目で見極め、判断できる力がこれからは重要である。

## 「女性の輝き」

経営学部2年 NS

ダーナ・ウェルトン女史、馬場さんに出会った瞬間、すぐにオーラの違いを感じました。輝いていてカッコいい！一流の方々の価値観や生き方を間近で聴くことができ、本当に良い刺激になりました。

ダーナ・ウェルトン女史は常に穏やかな笑顔。毎日の大変なお仕事のことも丁寧にお話してくれました。特にインドネシアの在ジャカルタ米国大使館に勤めていたときのことや、北海道の歴史について話すダーナ・ウェルトン女史はとても生き生きとしていらっしゃいました。お話を聴いて、さらに海外へ飛び出し、異文化にたくさん触れてみたいと強く思いました。

特に、インドネシアの美しい自然と民族衣装を自分の目で見てみたいです。「失敗を恐れないで。」最後におっしゃってくれたこの言葉。これから、ゼミの海外研修が待ち受けています。私にとって初めての海外なので、縮こまってしまうかもしれません。そんな時は、ダーナ・ウェルトン女史の言葉を思い出して、積極的に動きたいと思います。失敗したとしても、そこから成功するためにどうすれば良かったのかを学び、次に生かします！

馬場さんは、エネルギッシュなパワーあふれる方でした。馬場さんに将来の夢を聞かれ、あいまいに答えると、「なりたくないじゃなくて“なる”やろ！」と励ましてくれました。目が覚める思いでした。もっと自分に自信を持たなくては。胸を張って言えない自分がいるのは、まだまだ準備不足だからです。私は絶対なる！という強い意志と、他の人に負けない知識をつけて、あと2年後、後悔しないよう頑張ります。

この居酒屋懇親会を通して、自分の価値観を広げることができました。このような素晴らしい機会を与えてくださった、ダーナ・ウェルトン女史、馬場さん、ノボテルホテルの方々、そして菅原秀幸先生に心から感謝します。ありがとうございました。

## 「一流の人」

経営学部4年 HK

先日、アメリカの札幌総領事ダーナ・ウェルトンさんと領事館スタッフの馬場さんとお食事をして、色々なお話をさせていただきました。たくさんの為になるお話の中で私が一番身にしみて学んだことを3つにまとめたいと思います。

まず、やはりダーナさんが最後に一番学生たちに伝えたい言葉だとおっしゃった「失敗を恐れない」ということです。日本の学生たちは失敗しないように行動をする人が多いですが、ダーナさんは失敗さえも経験になり成功に繋がると考えていて、失敗したからといって人生が終わるわけではないし、失敗したなら何度でもチャレンジすればいいことだと

おっしゃっていました。私はこの言葉を聞いて、確かに自分自身も失敗を恐れて行動していて、そのせいで思い切って行動することが難しくなり、可能性を狭めていると感じました。失敗を恐れて可能性をなくすより、まずやってみてダメならまたチャレンジすれば良いという考えが、自分を含め今の日本の学生には足りないと思いました。

次に、様々な経験が大切だとダーナさんのお話を聞いて思いました。ダーナさんは、総領事になる前、美術館でアルバイトのようなことをやっていた期間があると話してくれました。自分もワーキングプアを感じたことがあると言っていたことに私は驚きました。アメリカ大使館の総領事を務めている人は、ずっとエリートでワーキングプアなどという言葉とは無縁だと思っていたからです。しかし、様々な経験をしてきたダーナさんだからこそ、今の総領事という役職が務まっているのだと思いました。「失敗を恐れないで」というメッセージもずっとエリートの第一線で活躍し、ワーキングプアなどと無縁の人に言われるよりもずっと心に響くものがあったからです。

最後に、ダーナさんは日本の芸術にとっても詳しくて驚きました。日本人の私たちの知らないことも詳しく知っていて、芸術を学んでいる人は品性があるように感じました。その国を知るには、芸術を学べば良いとおっしゃっていて総領事になられても常に勉強を怠らず素敵な人だと思いました。

今回、アメリカの総領事という職に就いて活躍している女性であるダーナ・ウェルトンさんのお話を聞いて、女性でも男性に負けなくらい活躍するためにはどうすべきか学べたと思いました。ありがとうございました。

## 「成長に必要な2要素」

経営学部 3年 NY

今回の在札幌米国総領事館総領事ダーナ・ウェルトン氏との懇親会で学んだことは「失敗を恐れないこと」と「無関心からの脱却」の2点である。

前者の「失敗を恐れない」とは、ダーナ・ウェルトン氏が繰り返しおっしゃっていたことだ。日本にも「失敗は成功のもと」ということわざがあるように、昔から言われていることなのだが、実際は日本で馴染んでいない風潮である。

失敗を恐れないということは、「チャレンジする」という精神に繋がる。チャレンジとは行動に移すことである。

日本の学生は机で勉強をするのが得意だ。しかし、チャレンジとは鉛筆を置き、自分の目で本物の世界を見、感じ学ぶことだ。机にしがみついて無理矢理に知識を頭に詰め込むよりも、その方がずっと有意義だ。

実際、私は今回の懇親会の前にダーナ・ウェルトン氏に聞く事柄を英語で考えたにも関わらず、聞くことができず、それは正に「失敗を恐れ」てのことだったので。不慣れな

英語で質問をすることが恐かったのです。

結果、在米国総領事と対談するという二度とないであろうチャンスを目の前で逃した。

「後悔先に立たず」懇親会の後は、正にその状況であった。

頭ではわかっている、それを行動に移すことがなかなか出来ない。失敗を恐れてしまう、その壁を越えることは、おそらくそんなに難しいことではない。少しの勇気を出せばいい。そして、得られるものはその何倍もの知と経験だ。

今回のチャレンジ出来なかったことを、プラスの経験に変えるべく、日々小さなことでも挑戦していき、失敗の壁を乗り越えていきたい。

そして後者の「無関心からの脱却」とは、米領事館で働いている馬場さんがおっしゃっていたことで、人間は誰も無関心に生活しているというお話だった。

私たちは、日々どれ程のものに関心を持って生活しているだろうか？私は、馬場さんからこのお話を聞くまで、そんなことすら考えたことがなかった。無関心に生きていることに気づいていなかった私にとって、これは新たな発見であった。

無関心は自己の成長の上で大敵である。無関心な人は、それ以上成長することはないだろう。

馬場さんは、「自分を変えたいのであれば、日常の小さなことでもいいから関心を持ち、行動に移すことが第一歩だ」と言っていた。例えば、ゴミステーションのゴミ捨てマナーが気になったら片づけてみる。そうすると、街を歩いていて、いつもは気にならなかった吸いがらやゴミが目に入ってくる。更には環境問題に関心が湧いてくるかもしれない。

このように、日常の中の何気ないきっかけが大きな何かに繋がる。無関心からの脱却が人生の選択肢を広げることを学んだ。

毎日が変化のない1日にならないように、日々アンテナを張り疑問や関心を持ち過ぎていきたい。

最後に、お忙しいなか懇親会に来てくださったダーナ・ウェルトン氏と馬場さん、会を開いてくださった菅原教授に感謝いたします。

## 「居酒屋懇親会に参加して」

経営学部2年 RT

初めに今回札幌米領事館ダーナ・ウェルトン女史との懇親会ということで多忙な中、来てくださったウェルトンさん、馬場さん、そして今回の懇親会を計画してくださった菅原先生に感謝します。自分の今後にとっても良い影響になりました。最初は慣れないフレンチと場の空気はかなり緊張気味でしたが気がつけばあっという間に時間が過ぎていきました。

「失敗を恐れないで」という最後にウェルトン女史がおっしゃった言葉について。世間では一般に「失敗は成功のもと」と言うがなかなか失敗を恐れて一步を踏み出せないでい

る自分がいました。「失敗」を情けない、かっこ悪いなどと思わないで「失敗」をプラスに考えてこれからの生活を送っていきたいです。何事にも挑戦するチャレンジ精神、壁にぶつかっても決して諦めない精神を持つという大切さを学びました。

そしてウェルトン女史は世界各国で活動し現地の風習などを知っていて経験の素晴らしさ、豊かさを実感させられました。私も今後世界に足を踏み入れて経験を積み何事にも失敗を恐れずがんばっていきたいです。そのためには語学の勉強がかかせないです。ウェルトン女史は日本語がとても上手でした。外国の人と接するには語学の勉強を今以上に少しでも会話できるようになりたいです。

また馬場さんも関西弁でずばずばと積極的に話しかけて下さるので、刺激になった部分が多々ありました。特に気になった一言で「わからないことがあったら自分で調べろ」という一言がありました。調べるという当たり前のことでも、自分自身「めんどくさい、誰かに聞けばわかるだろう」と投げ出している事が今までに多々あります。自分で調べることに意味がある。そして他人を頼らないという気持ちを常に持っていきたいです。

あっというまの二時間半でしたがとても楽しい、そして今後の自分のために目標を持てるお話を聞けました。今後の自分の目標は失敗に恐れず何事にも挑戦し諦めないでやり遂げる。そして、わからないことや疑問に思ったことは自分で納得いくまで調べる。この気持ちを忘れず日々の生活を送っていきます。

## 「“一流女性”のPASSION」

大学院経営学研究科修士1年 NS

管理職を務める女性は昨年の統計では平均5%という数字が出ています。このような環境下で、在札幌米国総領事館の総領事を務めるダーナ・ウェルトンさんと、同館の経済商務を担当されている馬場さんという、二人の“一流”の女性とお話する機会など、滅多にありません。私にとって今回の懇親会は、忘れたくない心に残しておきたい貴重な経験となりました。お二人に、心から感謝いたします。

お二方には、仕事の話だけでなく、家族のこと、休日の過ごし方など、私達の他愛もない質問に一つ一つお答えいただき、そのお話の節々に、私は感銘を受ける部分がありました。

まずは、ウェルトン総領事の仕事に対する情熱です。「次はどの国へ行きたいか、どのような野望があるか。」という私達からの質問に対して、総領事は、「その国を助ける力が私にあるのであれば、喜んでその国へ行く。」とおっしゃいました。自分の仕事に対する自信と誇りを表すこの言葉は、情熱で溢れており、私は総領事の仕事に対する考え方に魅了されました。

また、休みの日の話をしている時は、優しいお母さんの顔をしていたはずなのに、仕事

の話になった途端、アメリカ国民を守るために私はいるという、優しさだけでなく、すべてを包み込むような、また、緊張感を含む、総領事としての顔に一変したことも、私にとって非常に衝撃的でした。

多田さんの放った一言も衝撃でした。「こんな素晴らしい上司の下で働けることが私は本当に嬉しい。」という、ウェルトン総領事に向けた言葉は、今回の懇親会で一番心に響いた言葉です。

仕事は秒刻みでこなして行かなければならない、と仕事について漏らしていましたが、この言葉は、つらい仕事を共にいくつも乗り越えていかなければ言えないような、とても重みのある一言であったように感じています。

短い時間ではありましたが、ウェルトン総領事と多田さんから3つのことを学ばせて頂きました。それは、何事にも興味を持ち、情熱を持って取り組むべきであるということ、自分の生まれた国に誇りを持つべきであるということ、そして自分の国だけでなく世界にも目を向けていかなければいけないということです。

女性でありながら、広い世界で活躍されているお二人は、今後の私の目標です。日本にいと、ウェルトン総領事や多田さんのような女性に出会うことが少ないために、まだ、女性の社会進出が遅れているのではないかと、今は思っています。近い距離に目標になるような女性がいれば、その女性のように世界に羽ばたきたいと考え、活躍する女性マネージャーは増加するように感じます。

日本女性の社会進出が良い方向に進展していくよう、私も大学院卒業後は“一流女性”として自分の知識・経験を活かし、日本のため、そして世界のために尽くしていくことを望んでいます。今回の懇親会で私がお二方から“仕事に対する PASSION”を感じたように、今後は私が、後輩たちの身近な目標として女性の進むべき道を、情熱をもって示していけるよう、今は学生として精一杯勉強に励んでいこうと改めて思いました。本当に素敵な時間をありがとうございました。

## 「これからさらに頑張っていこう 夢の実現に向かって」

北海学園大学経営学科 修士1年 S R

一流の人物はさすが違う。在札幌米国総領事館総領事 Donna Welton 総領事とフランス料理を食べながらお話をさせていただく機会は、とても有意義でした。正直にいうと、やはり自分は経営学を学んでいる人間のせいか、何でもつい計算してしまいます。自分では、これはいいことだと思っています。ただ一度の人生だから、利益分析して過ごさないとな人生が無駄になる。そこで、会費の4000円の明細は、以下ようになります。

料理が 1000 円。

学んだ事は三点。一点ずつ 1000 円で合計 3000 円。

学食だったら半分の値段でお腹がいっぱいになる。1000 円のフランス料理はお腹がいっぱいにならなかった（おいしかったけど）。なので、帰ってから、お腹が空いて、カップ面を食べた（このような言い方で、折角値段を交渉して下さった菅原先生に申し訳ないけれども）。

学んだ事は、それぞれ一点 1000 円の値段は、とてもお得だ。しかし、もし、実践に生かす事が出来なかったらまったく意味がない。3000 円を無駄にしないように、学んだ事を頭の中で以下のように整理して、これから、実践しようと誓った。

第一は、学んだ事には、必ず意味があるということ。自分を含めて多分みんなは、最初は英語で頑張っただけだったけど、結局はうまく出来ず、日本語になってしまった。英語の重要性は、誰でも分かっていると思う。けれども、実際に英語を使う状況を考えていないだろう。つまり、みんな、すぐ使える事しか勉強しない。例えば、テストがあるから、勉強しなきゃという考え方。Rome was not built in a day. 若い時の知識の積み上げがとても重要だと再認識した。

第二は、若い時の苦労は財産になるということ。長い間 - 多分こう言い方だったら、菅原先生から「長い間ってどのくらい？」って言われるそうだから、はっきり言う。日本に来てから、ずーっと一つの事を考え続けてきた。「なぜオレは日本に来た？」「なぜ同じ世代の人が青春を楽しんでいる時、オレは苦労しなきゃならないの？」

多分これは私、あるいは我々留学生だけではなくて、夢を追って日々頑張っている若者は、たまにこう思うだろう。アメリカで十年の留学生活を経験した馬場さんに、最初アメリカに行った時の事について聞いた。やはり散々苦労したと語った。そのなかで私の答えが見つかった。今の投資はすぐに利益が見えないけど、長い目で必ず収益が得られる。

第三 . Donna Welton さんの話を聞いて、感想が一つ。一流の方は、さすが違うと思った。一番印象に残ったのは、皆からの質問に対してすぐ答えたこと。頭の回転が速いこともあるけど。やはり、自分がやりたいことが分かっている、その動機が明確で、それを達成するために何をすべきかをきちんと考えているからだろう。自分の足りない点は、ここにあると気付いた。つまり、what, why, how を常に考えることがとても重要だと分かった。

勉強になりました。またチャンスがあれば是非参加させて頂きたいと思います。どうも有り難うございます。貴重なお時間を私達のために使ってくださいました、ウェルトンさん、馬場さんに心より感謝申し上げます。